

# 多様性を尊重する子どもの育成を目指す授業づくり

## — 「振り返り」と「対話」の分析を通して —

学習開発分野 (22821648) 青木涼佳

本研究では、子どもの振り返りと対話を関連付けた分析を通して、多様性を尊重する子どもの育成を目指す授業づくりにおける有効な視点を明らかにすることを目的とした。子どもが相互的なやりとりの中で、学びを深めていくことを目指した授業実践を行った。対象児3名の分析から、有効な視点として、相手の思いを大切にしながら対話できるような題材の設定、子どもの考えを形成する過程での対話の場面の設定、学習のねらいに応じた振り返りの視点の焦点化が明らかになった。

[キーワード] 多様性, 深層のダイバーシティ, 振り返り, 対話, 授業づくり

### 1 問題と目的

2021年の中央教育審議会答申では、従来の社会構造の中で行われてきた「正解主義」や「同調圧力」への偏りから脱却し、「令和の日本型学校教育」の姿として、子ども一人一人の多様性と向き合いながら一つのチームとしての学びに高めていく、という強みを最大限に生かしていくことが重要であるとしている。「個別最適な学び」においては、子どもが自らの学習の状況を把握し、主体的に学習を調整することができるよう促していくこと、「協働的な学び」においては、子ども一人一人のよい点や可能性を生かすことで、異なる考え方が組み合わせり、よりよい学びを生み出していくようにすることが大切であるとされ、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実が求められている。このことから、子どもが互いに考えの違いを受容し、理解を深めながら学びを生み出していく授業の必要性があると考えられる。

前年度の研究では、多様性を尊重する子どもの姿を「立場が異なる相手との対話等において、他者の思いや考えを受容し、自分の考えを広げたり深めたりする姿」とし、多様性を尊重する子どもの姿がどのように表出しているのか、授業実践における対話を中心に分析を進めた。その結果、単なる答え合わせではなく、答えに至るまでの過程について話す子どもの姿や、自分の思いをうまく伝えられない友達に対して思いを引き出そうとする子どもの姿など、多様性を尊重しようとする子どもの姿が見られた。そこには、一方向的な教える・教えられるという関係性はなく、自分の考え

を伝え合い、理解を深める対等な関係による対話があったと考えた。だが、対話の分析を中心に研究を進め振り返りの分析まで実施しなかったため、子どもの中でどのような学びが生まれていたのかという点まで明らかにすることができなかった。

また、前年度の研究では、多様性を尊重する子どもの姿を「立場が異なる相手との対話等において、他者の思いや考えを受容し、自分の考えを広げたり深めたりする姿」とし、「立場が異なる相手」については、役割などの目に見えやすい立場の違いと捉え、研究を進めていた。中原(2022)は、多様性をとらえる考え方として、「表層のダイバーシティ」と「深層のダイバーシティ」という2つの要素を挙げ、「表層のダイバーシティ」とは、「人種や宗教、国籍といった、目に見えやすい人々の違い」、「深層のダイバーシティ」とは、「考え方、価値観、習慣、志向性、スキルといったような人間の『内面』の違い」としている。このことから、前年度の研究では、表層のダイバーシティに着目し、深層のダイバーシティにはあまり目を向けていなかったことになる。そのため、子どもが大切にしている思いや考えについて互いに聴き合ったり、それをきっかけに自分の行動を振り返ったりする等、考え方や価値観といった深層のダイバーシティに関わる振り返りや対話に焦点を当て、子どもの「新しいものの見方を手に入れる姿」を見取っていきたく考えた。

本研究では、多様性を尊重する子どもの姿を「他者との考え方の違いを受容し、新しいものの見方を手に入れ、学びを深める姿」とし、振り返

りと対話を関連付けた分析から、多様性を尊重する子どもの育成を目指す授業づくりにおける有効な視点を明らかにすることを目的とする。

## 2 研究の方法

本研究では、3名の対象児を選定し、教職専門実習Ⅲの授業実践における子どもの振り返りと対話を記録し、分析を進めた。振り返りと対話の分析を関連付け、考察した。

### (1)対象

山形県内A小学校2年生34名

### (2)対象児について

本研究では、3名の対象児を選定し、教職専門実習Ⅲの授業実践における振り返りと対話の記録・分析を進めた。前年度の研究では、一斉授業において配慮が必要と思われる子どもを選定していた。だが、本研究では、子どもが相手の考え方や思いを大切にしながら学んでいく姿を見ていくために、困り感を積極的に教師や周りの友達に訊く子どもも対象児童とした。対象児童については以下の3名を抽出した。なお、取り上げる子どもの名前は全て仮名である。

1人目は、一人でじっくり考えることが多く、自力解決の場などの個人活動の時間では、自ら困り感を表出することは少ないが、興味・関心のあることについては積極的に他者との対話を試みようとするホノカである。

2人目は、勉強は得意で授業中の発言も多いが、周りの友達と考えを交流しながら学んでいくことに課題があるイツキである。特に、正解と不正解のある問題になると、自分と異なる意見に対して強く反対したり、自分の考えが正しいと言い張ったりする傾向があり、自分の考えを押し通そうとすることが多い。

3人目は、個人活動では、周りにいる友達に分からないことを訊く、全体で活動するときには、教師に不明な点を尋ねる等、気になることや分からないことがあると、周りの友達や教師に自ら確認し、解決しようとするヒナタである。

ホノカは、困り感を表出させることは少ないが関心のあることについては他者との対話を積極的に試みることの多い子ども、イツキは、困り感を表出させることは多いが他者との考えの交流に課題のある子ども、ヒナタは、困り感を他者に積極的に訊き、対話を試みる子どもである。

ホノカとイツキは、前年度の研究の対象児と同様、一斉授業において配慮が必要とされる子どもとして選定し、ヒナタは、困り感を積極的に教師や周りの友達に訊く子どもとして選定した。

### (3)授業実践について

筆者は、教職専門実習Ⅲにおいて、国語科「たからものをしょうかいしよう」（東京書籍）の単元で合計7時間の授業実践を行った。本実践では、子どもが自分の宝物について、思いや願いを明確にしなが、相手に伝えたいことが伝わるように、話す順番や構成を工夫していくことをねらいとした。表1は、本単元の学習の流れである。

表1 学習の流れ

時間	学習内容
1	紹介したい宝物について、子ども同士で自由に話し合い、思いを膨らませる。
2	友達に自分の伝えたいことがよく伝わるようにするには、何をどの順番で話すよいか考え、紹介文を作成する。
3	3~4人の小グループで宝物を紹介し合う。
4	次時に向けて、紹介の練習をしたり話す内容を修正したりする。
5	2グループに分かれて宝物を紹介し合う。
6	
7	単元全体を振り返り、「たからものブック」を完成させる。

### (4)分析の視点

#### ①振り返りの分析について

まず、子どもの振り返りに着目し、子ども自身が自分の学びをどのように言語化していたのかを分析した。熊平(2021)は、「リフレクションレベル」を図1のように示している。



図1 リフレクションレベル (熊平, 2021)

熊平(2021)は、レベル1は「出来事や結果についてのリフレクション」、レベル2は「他者や環境についてのリフレクション」、レベル3は「自分の行動についてのリフレクション」としている。そして、レベル4は「自分の内面のリフレクション」であり、過去の経験に基づく成功法則が通用しない時には、意見・感情・経験・価値観の認知の4セットで自分の内面を振り返る必要

があると述べている。

本研究では、熊平 (2021) のリフレクションレベルを振り返りの分析の視点とし、対象児の毎時間の振り返りが、どのリフレクションレベルに当てはまるか照らし合わせることで、子どもの「他者との考え方の違いを受容し、新しいものの見方を手に入れ、学びを深める姿」の見取りを試みた。

#### ②対話の分析について

子どもの授業中の対話について分析した。授業終末に書く振り返りに、どのような対話が影響していたのか、明らかにしていくためである。納富 (2020) は、対話は相互的なものであるという立場から、「自分で言いたいことがあって、それを相手に知ってもらいたい、納得させたいと思っているとしたら、それは基本的には一方向的であり、伝達であっても、双方向的な対話とは言えません」と述べている。また、「すでに伝える内容が確定していて、それが対話をつうじて変わらないのだとしたら、対話の形をとった説得と変わらない」と述べている。さらに、対話の目指す地点を、「相手の語ることを理解する、けれどもそれを実行するかどうかについては、立ち止まってさらに自分でよく考えて相手に意向を伝える」相互的なやりとりが起こるところと述べている。

本研究では、子どもが多様な考えを受け止め、新しいものの見方を手に入れようとする姿を見ていくために、子どもが考えを形成していく過程での相互的なやりとりに着目して分析を進めた。具体的には、紹介する宝物を決めようとする場面や、宝物紹介で話す内容を修正していく場面の対話に着目した。

### 3 実践と分析

表 2 は 3 名の対象児の振り返りをまとめたものである。振り返りの視点は、授業のねらいに応じて設定したものである。

#### (1)振り返りの分析

ホノカの振り返りでは、1 時間目に「おかあさんのぬいぐるみのことを話せてよかったなあと思いました」と書いており、2 時間目に「くろっちはとても大事な人形なので、これからも大事にしたい」と書いている。3 時間目には、「(前略)くろっちのことをミウちゃんとヒナタくんに紹介できてよかったです。(中略) ジェシーは私の弟の誕生日のときにおじいちゃんがついでに買って

くれました。(後略)」と書いている。4 時間目の「②今日の学習での気づき」には「(前略) 最初は紙を見て動画を撮影してだめだったところを見つけて、今度は撮影せずにして最後に撮影して上手くなりました (後略)」と書いている。1 時間目には、ホノカは「ぬいぐるみ」と表現していた宝物が、2 時間目では、「くろっち」と人形の名前で表現され、「大事」という言葉が二度出てきている。さらに、3 時間目には、「くろっち」と他の人形についての出来事を書いている。また、4 時間目には、宝物をどのように紹介するか、表現方法を何度も練習していたことについて振り返っている。この 4 時間目の振り返りについて、ホノカがクロームブックを用いて、何度も試しながらやり直している姿がビデオ記録で確認できた。そのため、ホノカはそのときの試行錯誤を振り返っていると考えられる。1 時間目から 3 時間目までは、思ったことや出来事について振り返っているため、レベル 1 (出来事・結果)、4 時間目は、自分の行動について振り返っているため、レベル 3 (自分の行動) とした。このことから、ホノカは単元の冒頭で宝物紹介に対しての思いを膨らませ、4 時間目には表現方法についての試行錯誤をし、リフレクションレベルがレベル 3 (自分の行動) の振り返りになっていたと考える。

イツキの振り返りでは、1 時間目と 2 時間目に「友達のを聞いてこんなにあるんだなあと思いました」と書いていたが、3 時間目に「タカトくんのハムスターは、長生きしてほしいんだなあと思いました。ヒマリちゃんの歯が三本抜けたなんて初めて知りました。世界で一番生きてるハムスターは 8 歳まで生きるんだなあと思いました。」と書いている。4 時間目に「みんないっぱい書いてるからすごいなあと思いました。だからもっといっぱい書きたい。」と書いている。1 時間目と 2 時間目に「友達」と書いていたが、3 時間目には具体的に友達から聞いた話を書き、文章量も増えていた。4 時間目には「だからもっといっぱい書きたい」と宝物の紹介文に内容を書き加えようとする様子うかがえた。1 時間目から 3 時間目までは、他者と話して思ったことを振り返っているため、レベル 1 (出来事・結果) とした。4 時間目は、他者の行動から影響を受け、今後していきたいことについて書いていたため、レベル 2 (他者・環境) とした。このことから、1 時間目から 3 時間目

表2 対象児の振り返り

時間	学習活動	振り返りの視点	ホノカ	イツキ	ヒナタ
1	紹介したい宝物について、子ども同士で自由に話し合い、思いを膨らませる。	友達の話を聞いて気づいたこと	おばあちゃんのボタンとおかあさんのぬいぐるみのことを話せてよかったなあと思いました。 【レベル1 (出来事・結果)】	友達の話を聞いてこんなにあるんだなあと思いました。 【レベル1 (出来事・結果)】	宝物を見つけるのは難しかったけど、考えたら出てきたのでよかったです。 【レベル1 (出来事・結果)】
2	友達に自分の伝えたいことがよく伝わるようにするには、何をどの順番で話すときよいか考え、紹介文を作成する。	自分の宝物について、次の時間に特に友達に伝えたいこと	くろっちはとても大事な人形なので、これからも大事にしたいので、この文章を考えたので、みんなが分かればいいなと思いました。 【レベル1 (出来事・結果)】	友達の話を聞いてこんなにあるんだなあと思いました。 【レベル1 (出来事・結果)】	特に友達に伝えたいことは、パズルです。特に伝えたいことは2歳児でもパズルができたんだということを伝えたいです。 【レベル1 (出来事・結果)】
3	3~4人の小グループで宝物を紹介し合う。	宝物を紹介してみても、気づいたこと、迷ったこと。	宝物を紹介してくろっちのことをミウちゃんやヒナタくんを紹介できてよかったです。くろっちは寝るときも持っていました。でもトイストーリーのウッディの人形と迷ってしまいました。ウッディを買ったのは、夏休みの終わり頃でした。ジェシーは私の弟の誕生日のときにおじいちゃんがついでに買ってくれました。他は私の誕生日に揃いました。 【レベル1 (出来事・結果)】	タカトくんのハムスターは、長生きしてほしいんだなあと思いました。ヒマリちゃんの歯が三本抜けたなんて初めて知りました。世界で一番生きてるハムスターは8歳まで生きるんだなあと思いました。 【レベル1 (出来事・結果)】	今日、宝物を言うとき質問にどう答えたらいいかが迷いました。でも2番目に宝物を紹介できるかなと思いました。やってみると、質問が訊かれても答えられませんでした。良かったです。 【レベル1 (出来事・結果)】
4	次時に向けて、紹介の練習をしたり話す内容を修正したりする。	①自分の宝物について、特に友達に伝えたいこと。 ②今日の学習での気づき。	①くろっちをこれからも大事にすること。 【レベル1 (出来事・結果)】 ②私はクロームで撮影しましたが、最初は紙を見て動画を撮影してだめだったところを見つけて、今度は撮影せずに最後に撮影して上手くなりました。よかったです。 【レベル3 (自分の行動)】	① お金が高いし、かっこいい。 【レベル1 (出来事・結果)】 ②みんないっぱい書いているからすごいなあと思いました。だからもっといっぱい書きたい。 【レベル2 (他者・環境)】	①特に伝えたいことは、2歳児のときにやっていたからパズルが今も上手なこと。 【レベル1 (出来事・結果)】 ②ぼくはクロームで動画を撮ってみました。でも文章が短かったから、直しました。 【レベル1 (出来事・結果)】
5	2グループに分かれて宝物を紹介し合う。	今日の学習で気づいたことや思ったこと、考えたこと。	私は発表や質問などを全部やりました。ハルナちゃんやイツキくんの話で質問や感想をやった手を挙げてしゃべってよかったです。 【レベル1 (出来事・結果)】	トモキくんのボールの色がおもしろいなあと思いました。みんなの聞いてみんなの宝物が面白いなあと思いました。 【レベル1 (出来事・結果)】	(未提出)
6			今日は実物で紹介できなかつたけれどみんなくわしく紹介してくれたので分かりやすく簡単に紹介できてよかったです。 【レベル1 (出来事・結果)】	いっぱい感想や質問を言えてよかったです。全員言えたので良かったです。もっとやりたかったです。 【レベル1 (出来事・結果)】	今日、ぼくは質問や感想に手を挙げられませんでした。でもBグループのみんながしゃべってよかったです。 【レベル1 (出来事・結果)】
7	単元全体を振り返り、「たからものブック」を完成させる。	宝物のことが聞く人に伝わるように気をつけたこと。学習していくにつれて変わったこと。	初めて紹介したときはじたばたり間違ったりしていたけど、合わせて7時間目の紹介でしゃべれるようになったと思う。 【レベル1 (出来事・結果)】	はつきりと大きな声で言えた。伝わるようにゆっくり話せた。 【レベル1 (出来事・結果)】	ぼくは大きい声で発表できたからよかったです。あとは前は実物をあんまり想像できない文だったけど、他にも文章が書けたのでよかったです。 【レベル1 (出来事・結果)】

まで、リフレクションレベルはレベル1 (出来事・結果)と変化はなかったが、4時間目にリフレクションレベルがレベル2となり、学習への意欲が高まっていることがうかがえた。

ヒナタは、「自分の宝物について、特に友達に伝えたいこと」という振り返りの視点に対して、2時間目に、「2歳児でもパズルができたんだということ」、4時間目に、「2歳児のときにやっていたからパズルが今も上手なこと」と書いている。4時間目の「今日の学習での気づき」については「ぼくはクロームで動画を撮ってみました。でも文章が短かったから、直しました」と書いている。7時間目には、「前は実物をあんまり想像できない文だったけど、他にも文章が書けたのでよかったです。」と振り返っている。宝物について特に友達に伝えたいことを、ヒナタは、2時間目に「2歳

児でもパズルができた」と書いていたが、4時間目に「2歳児のときにやっていたから今も上手」と書いており、宝物について伝えたいことがより具体的な文章に変化がしていた。さらに、4時間目に、紹介文に修正を加えていたことがうかがえ、7時間目には、修正前と修正後の紹介文について振り返っている。2時間目と4時間目は、思っていたことや出来事について書いているため、リフレクションレベルは、レベル1 (出来事・結果)とした。7時間目の振り返りにについては、レベル1 (出来事・結果)か、レベル3 (自分の行動)か、判断が難しいところではあったが、試行錯誤を繰り返して困難を乗り越えたという内容の振り返りではないと考え、レベル1 (出来事・結果)とした。このことから、ヒナタは、2時間目も4時間目もリフレクションレベルはレベル1 (出来事・結

果)であったが、単元を通して、宝物について特に伝えたいことが何かをより明確にしていってと考えられる。

3 人の振り返りの分析から、着目した振り返りのリフレクションレベルはほとんどレベル 1 だったが、振り返っている内容も文章量もそれぞれ違いが見られた。ホノカは 1 時間目から 3 時間目にかけて、宝物を紹介することへの思いが膨らみ、4 時間目には、表現方法についての試行錯誤をしていた。そして、ホノカは 4 時間目にその行動について振り返り、リフレクションレベルがレベル 3 (自分の行動) に達していた。イツキは、3 時間目に友達の宝物についての話に耳を傾けたり、相手の宝物について質問したりすることで、学習への意欲を高めていたと考えられる。ヒナタは、宝物について特に伝えたいことを、2 時間目に「2 歳児でもパズルができたんだということ」と書き、4 時間目に「2 歳児のときにやっていたからパズルが今も上手なこと」と具体的に書いていた。7 時間目には修正前の紹介文と修正後の紹介文を比較し、どのように変化したかを振り返っていた。ヒナタは単元を通して伝えたいことを明確にしていたと考えられる。このように、ホノカは 1 時間目から 4 時間目、イツキは 3 時間目と 4 時間目、ヒナタは 4 時間目から 7 時間目に、宝物紹介への思いを膨らませる、表現方法を試行錯誤する、宝物について伝えたいことを明確にする等、学びの変容が見られた。このことから、対象児それぞれに、表出する時間やその変容の仕方に違いが見られたが、3 人に共通して、単元の中盤で振り返りの内容や文章量に変化があったことがわかった。

## (2)対話分析

ホノカの振り返りの分析から、ホノカは、1 時間目から 3 時間目に、宝物紹介への思いが膨らんだからこそ、4 時間目に表現方法を試行錯誤することにつながったと考えた。そのため、紹介したい宝物についての思いを膨らませることをねらいとした 1 時間目の対話の場面に着目し、ホノカが他者とのどのような対話をしていたのかについて分析を進めた。1 時間目の授業では、他者との対話を通して紹介したい宝物への思いを膨らませることをねらいとしたため、大切にしている宝物について自由に伝え合うことを主な学習活動とし、子どもに紹介する宝物を明確に決めるように指示はしなかった。そのため、紹介する宝物を何にする

のか、明確に決めていない子どもが多かったと考えられ、分析で取り上げる場面においても、ホノカは紹介する宝物を明確に決めていなかった状態であったと推測できる。以下に示すのは、1 時間目にホノカが自分の宝物であるボタンとぬいぐるみについて周りの友達と話している場面である。

ユミ：ねえ、ホノカちゃん、形は？ (1)  
 ホノカ：ぬいぐるみの？ (2)  
 ユミ：ううん、ボタンの。(3)  
 ホノカ：ボタンは色々だし、あのまあ今度クリスマスのときにサンタクロースの人形作る約束だから。じゃあサンタクロースの\_\_\_\_いっぱいになっちゃう。(4)  
 ユミ：一番お気に入りの形は？ (5)  
 ホノカ：色々あって、細長いのもあるし、丸いのもあるし、四角いのもあるし、金色のもあるし。一番はハートかな。(6)  
 コウタ：ぬいぐるみ何個あるの？ (7)  
 ホノカ：今は、ぬいぐるみは、まあ 10 個くらいあるかな。私 3 歳くらいのおときからやってるから、3 歳で初めてやったとき、ちょっと見てやってきたけど、うまくできなかった。今だと一人でやれることも多い。(8)  
 コウタ：じゃあ今まで一番好きなぬいぐるみは？ (9)  
 ホノカ：去年のハロウィンで作った黒猫のぬいぐるみ。(10)  
 コウタ：どこが気に入ってるの？ (11)  
 ホノカ：なんかね、しっぽがクルってなってるの。(12)  
 アイネ：今、何について話してるの？ (13)  
 ホノカ：黒猫のぬいぐるみの話。目が、なんか、あの、緑と黒の一つずつ付けたのが、弟のかっちゃんが「こわーい」って。(14)

ユミは(5)で、コウタは(9)と(11)で、「お気に入りの」「一番好きな」といった言葉が用いた質問をしており、ホノカの宝物について、その宝物を大切にしている背景を探るようなやりとりがなされていた。対話の後半には、ホノカがアイネに「今、何について話してるの？ (13)」と訊かれても、「黒猫のぬいぐるみの話 (14)」と一言で答え、再度宝物の話に戻っていた。このことから、ホノカは、ユミとコウタの質問によって、宝物に対する思いが引き出され、宝物について話すことに没頭する姿につながったと考えられる。

イツキの振り返りの分析から、イツキは、3 時間目の振り返りで文章量を増やし、初めて具体的に友達から聞いた話を書き、4 時間目では学習への意欲が高まったことがうかがえた。そのため、3 時間目の対話の場面に着目し、イツキはどのような対話をしていたのかを分析した。この対話の場面では、タカトの宝物である「ハムスターのハムちゃん」について、どうしてその名前を付けたのかについて言葉が交わされていた。以下は、タ

カトの宝物である「ハムスターのハムちゃん」について話している対話の場面である。

ユイ：ねえねえねえ、なんでハムちゃんって名前したの。(1)  
 タカト：なんかさ、言うんだけど、広告に名前が載ってたから。(2)  
 ヒマリ：えー。(3)  
 ユイ：分かった。これでしょ？ハム。ハム。(4)  
 タカト：えーと、言うのはずかしいんだけどさ、広告に載ってただけ。(5)  
 ユイ：なんで広告なの。(6)  
 イツキ：広告って何？広告って。(7)  
 タカト：広告って知らないの？(8)  
 ユイ：何の広告ですか。(9)  
 タカト：えっと、えっと、張り紙。(10)  
 ユイ：え？(11)  
 タカト：いや違う。なんだっけなんだっけ。(12)

イツキは、しばらく3人のやりとりを聴いていた。タカトが「広告に載ってた(5)」とハムちゃんの名前の由来について再度説明すると、イツキは「広告って何？(7)」と訊き、初めて発言していた。イツキはこの対話の場面では終始前かがみの姿勢をとり、隣の席のタカトの机に肘をつけて話を聴いていた。イツキは、3人のやりとりに関心をもち、耳を傾けていたと思われる。この対話の後、ユイとヒマリ、タカトとイツキというペアになっての対話が始まった。ペアでのやりとりでも、タカトとイツキはハムスターについて話しており、イツキがタカトに、「ハムスターは何年生きるのか」や、「世界で一番生きるハムスターは何年生きるのか」等、ハムスターの寿命について聴く姿が見られた。これは、相手の宝物について、その宝物を大切にしている背景を探っている質問であったと考えられる。イツキは友達の話に関心をもち、耳を傾け、宝物を大切にしている相手の思いを引き出そうとしていたと考える。

ヒナタの振り返りの分析から、ヒナタは、単元を通して、宝物について伝えたいことをより明確にしていたと考えた。そのため、宝物を紹介するときの文章に修正を加え、更新していた4時間目の対話の場面に着目した。図2は2時間目に作成した紹介文、図3は4時間目終了時の紹介文である。この対話が始まる前、ヒナタは図2の紹介文に「はじめてパズルができたからぼくのたからものになりました」「アンパンマンのパズルのピースは、七ピース」「2歳児のとき」と書き加えていた。そして、「そんなに思いつかないや(1)」とつぶやいたところに担任教諭が来て、対話が始まっていた。

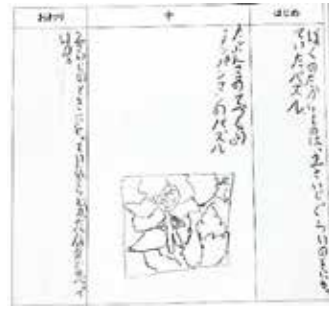


図2 ヒナタが2時間目に作成した紹介文



図3 4時間目終了時のヒナタの紹介文

ヒナタ：そんなに思いつかないや。(1)  
 T：一気に増えたね。(2)  
 ヒナタ：だけど、あんまり思いつかない。(3)  
 T：7ピースなんだね。(4)  
 ヒナタ：7ピースぐらい。(5)  
 T：「ぐらい」なんだね。(6)  
 ヒナタ：ぐらいだ。(7)  
 T：今もあるの？家に。(8)  
 ヒナタ：うん。(9)  
 T：やるの？(10)  
 ヒナタ：やんないけど。(11)  
 T：それも書いたら？やらないけどお家にありますって。2歳のとき？(12)  
 ヒナタ：2歳のとき、やってたから今でも上手なの。(13)  
 T：今でも上手なんだ。(14)  
 ヒナタ：だから、やってたから上手なの。(15)

担任教諭は、まず、「7ピースなんだね(4)」と訊き、ヒナタは「7ピースぐらい(5)」と返し、「ぐらい」と書き加えていた。次に、担任教諭が「今もあるの？家に(8)」と訊き、その後のやりとりで、ヒナタが「今は使っていないけどアンパンマンのパズルがあります」という文を新たに書き加えていた。最後に、担任教諭が、ヒナタが書き加えていた部分を指差しながら「2歳のとき？(12)」と訊き、「2歳のとき、やってたから今でも上手なの(13)」と話していた。その後、担任教諭が「今でも上手なんだ(14)」とヒナタが話したことを繰り返すと、「だから、やってたから上手なの(15)」と返していた。このことから、ヒナタは担任教諭とのやりとりの中で、自分の紹介文の違和感に気づき、紹介文の内容を増やし、伝えたいことを整理していったと考えられる。担

任教諭が、ヒナタの言葉を繰り返したり、引用しながら問い返したりしたことが、最適な言葉や文章を考え、伝えたいことを整理するヒナタの姿につながったと考えられる。

#### 4 考察

本研究では、多様性を尊重する子どもの姿を「他者との考え方の違いを受容し、新しいものの見方を手に入れ、学びを深める姿」とし、振り返りと対話を関連付けた分析から、多様性を尊重する子どもの育成を目指す授業づくりにおける有効な視点を明らかにすることを目的とした。

まず、ホノカの振り返りとその振り返りに関連する対話の分析から、ホノカの、「他者の視点を受容し、宝物紹介への思いを膨らませ、表現の練習を振り返る姿」が見られた。ホノカの振り返りの分析では、ホノカが宝物を紹介することへの思いを膨らませていたことがうかがえ、表現の練習もしていたことがわかった。そのため、子どもが宝物について思いを膨らませることをねらいとした 1 時間目の対話の分析を行った。他者からの質問によってホノカの宝物に対する思いが引き出され、膨らんでいく様子が見られた。対話の記録の後半では、ホノカは宝物について話すことに没頭していることがうかがえた。一人でじっくり考えることが多いホノカが、4 時間目には表現方法について試行錯誤を重ね、振り返りでリフレクションレベルがレベル 3 (自分の行動) にまで達したのは、単元冒頭で友達からの質問に答えていく中で、他者の視点を受容し、宝物について思いが膨らんでいったためだったと考えられる。

次に、イツキの振り返りとその振り返りに関連する対話の分析から、イツキの、「関心をもって他者の考えを受容し、学習への意欲を高める姿」が見られた。イツキの振り返りでは、イツキは、3 時間目に文章量が増え、友達の話聞いて思ったことをまとめていた。そのため、3 時間目の振り返りで、友達の話聞いて思ったことを具体的に書いていたのは、どのような対話があったからなのかを見ていくために、3 時間目の対話分析を行った。友達の宝物の話に関心をもって耳を傾け、その宝物を大切にしている背景を探るやりとりをする姿が見られた。普段、自分の考えを押し通すことが多く、友達と考えを交流することに課題のあるイツキが、3 時間目の振り返りで文章量が増

え、友達の話聞いて思ったことを具体的に書くという変化が見られたのは、対話で友達の話に関心をもって耳を傾けたり、宝物についての相手の思いを引き出そうとしたりしたことが影響していたためと考えた。だが、イツキが学習への意欲を高めた後、どのように学びを深めていったのかを見取ることはできなかった。

最後に、ヒナタの振り返りとその振り返りに関連する対話の分析からは、ヒナタの、「他者の話に傾聴し、思いを明確にしながら、伝えたいことを整理する姿」が見られた。ヒナタの振り返りは、「宝物について特に友達に伝えたいこと」が、2 時間目は「2 歳児でもパズルができたんだということ」だったが、4 時間目には、「2 歳児のときにやっていたからパズルが今も上手なこと」と書いており、変化が見られた。さらに、7 時間目には修正前の紹介文と修正後の紹介文を比較し、「前は実物をあんまり想像できない文だったけど、他にも文章が書けたのでよかったです」と振り返っていた。ヒナタが伝えたことを明確にしていったのはどのような対話があったからなのかを見ていくために、4 時間目にヒナタが担任教諭とのやりとりをしている対話の分析を行った。担任教諭が、ヒナタの言葉を繰り返したり、引用しながら問い返したりしたことで、ヒナタは伝えたいことを整理していた。また、担任教諭とのやりとりの中で、ヒナタは元々自分の紹介文にはなかった一文を書き加えていた。分からないことがあると周りの友達や教師に自ら確認し、解決しようとすることが多いヒナタが、4 時間目に伝えたいことをより明確にしていったのは、担任教諭とのやりとりを通して新たな視点を取り入れ、自分の宝物のことが相手によく伝わるように最適な言葉や文章を探る対話があったことが影響していたと考えた。だが、ヒナタがどのように他者との違いを受容していたかを見取ることはできなかった。

多様性を尊重する子どもの姿について、「他者との考え方の違いを受容し、新しいものの見方を手に入れ、学びを深める姿」としたが、イツキの「学びを深める姿」とヒナタの「他者との考え方の違いを受容する姿」を見取ることはできなかった。だが、イツキの「他者との考え方の違いを受容し、新しいものの見方を手に入れる姿」、ヒナタの「新しいものの見方を手に入れ、学びを深める姿」は見取ることができたため、イツキとヒナ

タにおいては、多様性を尊重する子どもの姿に近づいていたと捉えることができる。3名の対象児の姿から、以下の3点が多様性を尊重する子どもの育成における有効な視点として考えられる。

1点目は、相手の思いを大切にしながら対話できるような題材の設定をしたことである。今回の授業実践では、題材として「子どもの宝物」を扱った。対話の分析からは、互いに思いを大切にしながら言葉を交わす子どもの姿や、相手が大切にしている宝物への思いを汲み取ったり引き出したりする子どもの姿が見られた。子どもが自分の「宝物」について話し合うことは、子ども一人一人が正解主義に囚われずに伝えたい思いを持ち、互いに思いを大切にしながら対話することにつながると考えられる。

2点目は、子どもが考えを形成する過程で対話の場面を設定したことである。今回の授業実践では、子ども同士で対話する時間を、紹介する宝物を決めた後や紹介文を完成させた後ではなく、紹介する宝物を決める過程や紹介文を全て完成させる前段階に設定した。振り返りの分析では、対象児3人に共通して、単元中盤で振り返りの内容に変化が見られた。そのため、紹介文を全て完成させる前に、意図的に対話の場面を設定することで、思いを汲み取ったり引き出したりする子どもの姿や伝えたいことを明確にしていく子どもの姿につながったと考えられる。

3点目は、学習のねらいに応じて振り返りの視点を焦点化したことである。本実践では、2時間目の学習のねらいを「宝物のことが相手によく伝わるように、話す内容を組み立てること」、4時間目の学習のねらいを「宝物紹介に向けて、伝える内容や表現をさらによいものにしていくこと」とし、どちらの授業も振り返りの視点を、「自分の宝物について、特に伝えたいこと」と提示した。これは、子どもが宝物について特に何を伝えたいのか、思いをもつことで、話す順番や表現の方法を工夫する姿につながるのではないかと考え、提示したものである。振り返りの分析から、対象児全員が、2時間目のリフレクションレベルが1（出来事・結果）だったが、4時間目にはホノカはレベル3（自分の行動）、イツキはレベル2（他者・環境）とリフレクションレベルとなり、変化が見られた。ヒナタは4時間目のリフレクションレベルが1（出来事・結果）だったが単元を通し

て宝物について伝えたいことが明確になっていた。振り返りの視点の焦点化は、子ども自身による表現の仕方の吟味、次の授業のしていきたいことの実体化、伝えたいことの整理につながっていたと考えられる。

## 5 今後の方向性

本研究の実践は、単元後半になるにつれて、他者との対話を通して、リフレクションレベルがレベル2（他者・環境）やレベル3（自分の行動）に変化していくことを期待していた。だが実際は、単元を通してレベル1（出来事・結果）の振り返りがほとんどであり、対話を重ねた単元後半になってもそれは変わらなかった。その要因の一つとして、単位時間内の学びの振り返りにとどまる視点を提示していたことが考えられる。例えば、4時間目の「今日の学習での気づき」、5時間目の「今日の学習で気づいたことや思ったこと、考えたこと」、7時間目の「宝物のことが聞く人に伝わるように気を付けたこと」といった視点である。一方、7時間目のヒナタの振り返りを見ると、単元全体で学びを振り返っている姿も見られた。これは、振り返りの視点の二つ目である、「学習するにつれて変わったこと」が影響していると考えられる。今後は、子どもが、単元を通して学びをつなぐ授業を目指し、実践を重ねていく。

## 引用・参考文献

- 中央教育審議会（2021）『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）, [https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/079/sonota/1412985\\_00002.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/079/sonota/1412985_00002.htm)（最終閲覧2024年1月30日）
- 中原淳（2022）『「対話と決断」で成果を生む 話し合いの作法』, 株式会社PHP研究所。
- 納富信留（2020）『対話の技法』, 笠間書院。
- 熊平美香（2021）『リフレクション 自分とチームの成長を加速させる内省の技術』, 株式会社ディスカヴァー・トゥエンティワン。

*Creating classes that aim to nurture children who respect diversity: Through the analysis of "reflection" and "dialogue."*

*Suzuka AOKI*